

北米視察報告

報告者氏名：木下 憲司

1 視察の目的

円滑な空母交代の一助とするために（本市と米軍基地との信頼関係の推進のために）

- ① 北米サンディエゴ／コロナド両市に展開する米軍施設、およびハワイ州の太平洋艦隊司令部を訪問し、米海軍の太平洋艦隊展開の基本戦略を聴取する。また、基地と周辺居住区との友好関係の構築状況や危機管理体制について最新の情報を聴取する。
- ② 空母交代に係る乗務員や航空要員への最新教育状況を聴取する。
- ③ 原子力空母(CVN73)ジョージ・ワシントン（以下「GW」と表記）の火災の詳細と修理状況を確認し、今後の配備予定などを聴取する。
- ④ グローバル企業誘致という視点から、横須賀基地に技術者を派遣している「ノースロップ・グラマン社」の海外事業責任者に面会し、本市企業誘致施策の優位性などをアピールする中で、企業の関心を喚起するべく自主的議員外交を行う。

2 視察旅程

6月23日(月) カリフォルニア州 ロサンジェルス

- ・ノースロップグラマン社 市長企業誘致メッセージ手交 意見交換

6月24日(火) カリフォルニア州 サンディエゴ市

- ・ノースアイランド洋上視察 空母バースとコロナド住宅地との距離感
- ・日本企業駐在員（JVC INDUSTRIAL AMERICA, INC）との意見交換

6月25日(水) カリフォルニア州 サンディエゴ市／コロナド市

- ・「Pacific Beacon」Public Private Venture：民間資本導入による海軍独身住宅
- ・コロナド市役所：市長とシティーマネージャ 米海軍との関わりと防災協定
- ・ノースアイランド航空基地視察／海軍航空隊司令部：空母戦闘群の役割
- ・「GW」艦長 CAPT Dave Dykoff 氏 ランチ・ミーティング：日本配備に向けての準備など
- ・空母ステニス(CVN74)乗艦：ブリーフィングと「GW」における火災状況説明

6月27日(金) ハワイ州 ホノルル

- ・太平洋艦隊司令部（Commander, Pacific Fleet）：ブリーフィング：太平洋艦隊の任務と現状
- ・RIMPAC2008 参加第3護衛隊群の護衛艦「きりしま(DDG174)」訪問

3 同行議員

上地克明、佐久間則夫、青木秀介、伊関功滋

視察項目① Los Angeles ノースロップ・グラマン社 6月23日

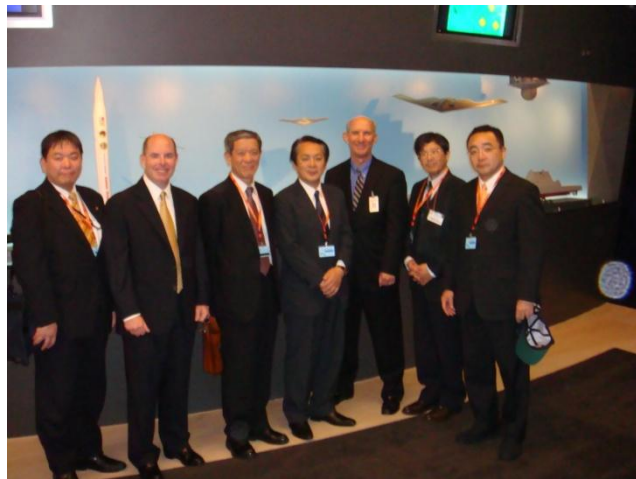
企業戦略担当副社長：Mark S. Ureda 氏

経営戦略部長：Edward Harshberger 氏

- (1) (ヒアリングより)軍事も投資とリターンであり、グラマン社はペンタゴンの情報をインターネット網の様に関連づけ統合する軍事産業ではあるが、その技術と可能性を経営陣により引き出し、最高のポートフォリオ(有価証券資産表)を形成し、未来を築く企業である。
- (2) (視察団より)蒲谷市長のメッセージと横須賀市の企業誘致パンフレットを手交した。YRP など先端移動体通信の研究用地もあるので、投資に値する土地であると説明を行った。



右：Mark S. Ureda 副社長



副社長と同行議員団

- (3) (ヒアリングより)市長メッセージに感謝する。私(副社長 Mark S. Ureda 氏)も日本には数回行ったが横須賀はない。基地にも当社の技術者も入っていると聞く。私たちのGWの配備にご協力いただき感謝する。

視察項目② CVN バースとコロナド市街地の距離 6月24日

洋上から、コロナド市の住宅街と原子力空母接岸場所の距離感を見た。左の写真は、ノースアイランド基地に近いフェリー乗り場の公園である。



スアイランド基地に近いフェリー乗り場の公園である。洋上から見ると、原子力空母3隻が係留されているバースと、左写真の海岸はすぐ近くだが、デッキチェアでくつろぐ人も多く。カフェテリアやお土産ショップが人気である。基地に近い住宅地が一番地価が高いということが、市民の原子力空母に対する信頼度を物語っている。



((写真左)

2隻の原子力空母(CVN74)と(CVN73)の左側にコロナドの住宅地が展開し、空母のすぐそばをヨットが航海する。

(写真右)

対岸の、サンディエゴ市側のノース・ハーバー・ドライブにあるピアには 1992 年に退役した空母ミッドウェイ(CV41)が博物館として人気を集めている。フライト・デッキでは元乗組員による航空機講座が人気を博している。博物館としてのオープン以来 300 万人の来場者を誇る。



視察項目③日本企業駐在員との意見交換 6月24日

(JVC INDUSTRIAL DE MEXICO の 社長 佐藤範男氏及び総務 平岩譲次氏からヒアリング)
今回、お話をお聞きした佐藤氏が社長を務める J V C アメリカ工場は、メキシコのティファナ(Tijuana)に 1995 年 2 月に創設された。

Projection TV, Plasma TV, LCD TV, HD-ILA TV などを生産しており、従業員数は 1,913 人、現地採用日本人従業員 93 人のうち大半はサンディエゴ市内に居住する。対岸のノース・アイランドに配備されている原子力空母に対して、どのような感情があるのか、サンディエゴ市民としての基地との関わりなどをヒアリングした。

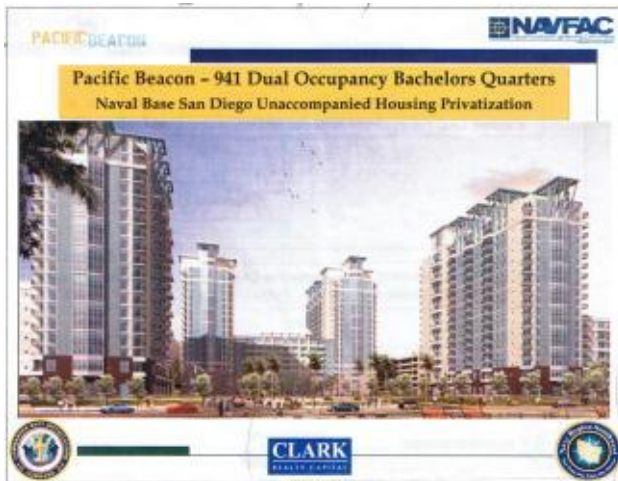
- (1) 原子力空母が停泊していることは承知しているが、サン・オ・ノフェ地区の古い原子力発電所なども安全に稼働しているので、「危険」だという意識はない。
- (2) 市内に居住する日本人である私たちを含めて、アメリカやサンディエゴ市を愛する意識が強い。大切なことは国の政策について批判する人はいるとしても、軍で働く若者達をサポートしようとする市民意識は高いことだ。
- (3) 今日のように 3 隻の空母が並んでいるところを見ると、駐在員としても心強いし誇らしい気分になる。
- (4) 基地の存在については、防衛・愛国心・文化、性善性悪説など様々なアプローチがあり、簡単な言葉で評価できるものではない。
- (5) ベトナム戦争以降徴兵制がなくなり、兵士の質が若干低下したのではないか。軍は奨学金制度や住宅政策を強化して優秀な人材のリクルート活動を活発に行っていることを実感できる。



ノースアイランドに停泊中の3隻の原子力空母
(左より)ステニス(CVN74),ジョージワシントン(CVN73),ニミッツ(CVN68)

- (6) 「9・11」の時は、国境線が閉鎖され、メキシコ内企業に勤務する日本人駐在員の多くは、居住地であるサンディエゴに待機した。
- (7) 横須賀市のように、基地の中に居住区があり、あちらとこちらというような意識はない。軍と一緒に街が動いているという感じがする。
- (8) サンディエゴ駐在従業員は、マスメディアからの情報ではなく、インターネットを介して自分の欲しい情報を得ている者が多い。
- (9) 海軍がコロナドやサンディエゴを大きくしたという歴史認識があり、この点は横須賀市に似ているのではないか。
- (10) 米兵による犯罪も皆無ではないが、JVCのあるティファナでは、人口200万人に対して1年間に200人以上が犯罪による犠牲になっている。本音を言えば確率的に米軍関係犯罪とは比較にならないほど国内犯罪が深刻であるというところだ。

視察項目④民間資本導入による海軍独身住宅 (PPV) 6月25日



PPVとはPublic Private Ventureの略で、民間会社(ここではCLARK投資会社)と海軍省(Department of the Navy)が資本を出し合って会社を立ち上げて、米軍独身住宅(BEQ)の建設工事を行い、完成した建築物を海軍省にリースするというもので、日本で行われているPrivate Finance Initiativeと共通点もある。

『Pacific Beacon』と呼ばれる今回のプロジェクトは、兵士のE-4階級以上を対象として、18階建て建物3棟計941戸(1戸を2人使用)と管理棟を米海軍所有地内に2年半の建設期間で建設している。

基本には「水兵は国の宝」という考え方があり、停泊艦船の中に宿泊していた若い兵隊も地上に居住する権利が与えられたことが、PPVを推進するきっかけとなった。華美な建物ではないかという質問に対しては、国の政策に対する賛否は別として、市民の間には若者の兵隊達を応援する気持ちが共通して強い。

332億円の開発コストに対して、米海軍の負担は42億円、CLARK投資会社が5億円を出

資し、差額は将来見込まれる収益分を債権として発行し資金調達している。リース契約期間は50年間だが、当初の5年目で利益が出始める試算をしている。今回のプロジェクトの隣接地にあるポーマーウォールと呼ばれる場所での既存米軍住宅の改装が完成しており、そこで発生した利益(キャッシュ・フロー)を新しい『Pacific Beacon』プロジェクトへ投入している。

構造的には、対テロ対策が施され、地震の多いカリフォルニア州の「ゾーン4」に対応した堅固な建物となっている。

説明にあたったサンディエゴ海軍基地のフィッシュ中佐(CDR Sharee Fish)が、印象的な発言をした。「住宅政策も重要だが、若い兵士は勉強を続けたいという意志が強い。今後は一般教育活動に力を入れていかなければならない」というもので、これは、日本に駐留する兵士達に対する自治体の接遇や犯罪防止策のヒントではないだろうか。パトロールも重要だが、一方で基地の外での様々な日本文化に対する交流や教育の機会も増大させるべきだと思う。



中央は管理棟。プール、アスレチック、ファスト・フード、カウンセリング・ルームなどが完備される。

視察項目⑤コロナド市と基地の関係について 6月25日

コロナド市長 Tom Smisek 氏

及びシティー・マネージャ Mark Ochendusko 氏

サンディエゴ市の対岸、空母が接岸するノースアイランドの隣に位置する高級住宅街区である。人口は24,100人(9,494戸)、白人が圧倒的に多い。日本の地方都市と、コロナド市の決定的な違いは、シティー・マネージャの存在である。市長自ら「市長はパートタイムジョブで、シティー・マネージャが私と相談した上で重要な決断を行う。」というようにシティー・マネージャは民間会社の執行役員のような存在だ。

米軍との関係で特徴なことは、『Priority System』が米軍と合意されている点だ。これはコロナド市と基地の間に常にコンタクトを行うものだ。滅多にトラブルはないが、シティー・マネージャと基地司令官が密接に連絡を取り合っており、小さな事象(Incident)や事故(Accident)は報告を受けている。「GW」の火災もコロナド市には直接影響ないが連絡があった。また、艦船の入港情報も米軍から受け取っている。横須賀市における蒲谷市長とジェームズDケリー在日米海軍司令官との間のホットラインも、コロナド市からヒントを得たものであろう。

『公開会議』について。コロナド市では、米軍関係者を含むサンディエゴ/コロナドのシティー・マネージャが毎月定例会議を行っている。さらに、市は市民の安全を守る責務があることから Public Meeting を定期的に公開で行っている。

市の米軍に対する権限も『Priority System』の重要な要素で、別途『相互支援協定(Mutual Aid Agreement)』による手続きがある。重大な事故や災害が発生した際には、シティー・マネージャ→軍(基地)→州→合衆国の伝達網を用いる。緊急指揮所(EOC)が設置され、水源の共同使用や訓練などもお互いの施設を使用する。

コロナド市が抱える問題として、コロナド・ブリッジが完成して以来、交通量の増大(特に基地へ向かう車両の住宅地内通過交通)が深刻である。トンネルなどの対策を考え現在環境アセスを行っている。

修理のために停泊してる空母ジョージワシントン(CVN73)の乗組員のために、勉強の場として学校を開放していることに、空母の乗組員が感謝をしていたことを付け加える。

(Tom Smisek 市長より) コロナドが世界で一番の NAVY TOWN だと自信と誇りを持っている。



市庁舎玄関にて



市長とシティー・マネージャーからのヒヤリング

視察項目⑥ ノースアイランド 海軍航空隊司令部(CNAF) 6月25日

海軍航空隊司令官 キクライン中将(ADM Tom Kicline)の出迎えあり。

ブリーフィングはワーナー大佐(CAPT Jake Werner)

- (1) ノース・アイランドの海軍航空隊の任務は次の二つである。
 - ・前方展開の支援(Forward Deployment)
 - ・戦闘能力の示威(Engagement - Combat Operations Presence)
- (2) 戦力は空母 11 隻、航空隊 10、航空基地 25、艦船 168、航空機 3600 兵員 100,000 人である。
- (3) 空母展開 11 隻(太平洋に 6 隻、東海岸に 5 隻)
 - 太平洋 USS Kitty Hawk (CV 63), USS Nimitz (CVN 68),
 - USS Carl Vinson (CVN 70), USS Abraham Lincoln (CVN 72),
 - USS John C. Stennis (CVN 74), USS Ronald Reagan (CVN 76)
 - 大西洋 USS Enterprise (CVN 65), USS Dwight D. Eisenhower (CVN 69),
 - USS Theodore Roosevelt (CVN 71), USS George Washington (CVN 73),
 - USS Harry S. Truman (CVN 75)
- (4) 危機対応出撃は昨年 144 件。最近の出撃傾向は、「人道支援」が多く、インドネシアの津波、フィリピンの台風ダメージなど、昨年延 1,747 回。兵隊 1,200 人がボランティアで救援活動に従事した。
- (5) 将来は F35 Joint Strike Fighter や CVN-21 などの最新装備の導入を検討している。

視察項目⑦CVN73 GWの火災と配備について 6月25日

空母ジョージワシントン艦長 ダイコフ大佐 (CAPT Dave Dykhoff)

空母ステニス艦長 ヨハンソン大佐 (CAPT Bradly Johanson)

米海軍原子炉管理局上級代表 横須賀駐在 ジョー・ギスト(Dr.Joe Gist)博士

空母ジョージワシントン ダメージ・コントロール担当将校 他

空母ジョージワシントン(CVN73 以下「GW」と表記)の現場検証については残念ながら実現しなかった。しかし、同型空母 ジョンCステニス(CVN74)に乗船し、火災発生現場とその延焼過程をトレースしていくことが出来た。むしろケーブルの配置具合など実際の複雑な消火活動をシミュレート出来たことは幸いだった。また、「GW」艦長のダイコフ大佐(CAPT Dykhoff)をはじめとして、ステニス内を案内してくれたスタッフすべてが、本日説明できるものは、すべて記録していただいて良いという方針で非常に協力的な印象を受けた。

(「GW」艦長ダイコフ大佐より) 『火災が起こったことは悲しいことですが、船員・技術者・責任者が力を合わせて、安全性が増すようにきちんと修理を済ませて、横須賀に行けるようにしたいのでご理解ください。不安とエキサイティングな感覚がありますが、全員の力で配備を完了させたいです。』



CAPT Dykhoff

⑦-1 火災の場所と原因について

火災が発生したのは、右舷、艦橋の位置する付近の喫水線下のデッキの「補助ボイラー室」である。補助ボイラーはステニスでは使用していないので現在は倉庫になっている。原因の調査については、艦長のダイコフ大佐の手を離れているが、必ず究明して適切に公開するとの発言があった。

⑦-2 火災の状況について

5月22日午前7時50分、補助ボイラー室付近から出



熱により大量の配線類がダメージを受けた

火。何らかの可燃物が換気トランクに置いてあり、火災が広がった可能性が高い。火元の補助ボイラーの使用目的は、クッキングとか食器洗いのスチームを発生するものである。

火災の発見(検知)は、上層階のデッキで煙が発生したため発覚した。これは換気トランクの塗料が熱で溶けてきたためだと考えられる。

非常に大量のケーブルが溶けてしまい修理に多大な時間を要しているが、なぜ、火災や接触損傷の影響を受けやすい露出配線になっているかとの問いに対しては、検査・交換を容易に行えるようにするためとのことだった。



写真: 「GW」における補助ボイラーの設置してあった場所。ステニスでは補助ボイラーは使用していないので倉庫となっている。

⑦-3 修理の状況と横須賀配備の時期について

「GW」の横須賀配備の時期については、ジェームズ D ケリー在日米海軍司令官と艦長のダイコフ大佐も、配備が遅れる可能性を示唆していた。

私たち議員団の推測では、修理作業自体はまもなく(10日~2週間)完了し、今後「BLUE WATER CIRTIFICATION(横須賀基地SRFで行うSEA TRIALと同様)」と呼ばれる性能評価に一ヶ月以上を費やすと見込まれるので、その微調整から横須賀基地までの航海期間2週間程度を勘案すれば、9月中旬~10月初旬と想像できる。

⑦-4 日本上陸前の乗員訓練など

船員教育については、多くの訓練プログラムを実施していた。ノーフォーク海軍基地にいるときから、出航し南米から東海岸に至る航海上でも、横須賀の海軍基地から教官を呼び、日本の文化・習慣を学習してきた。基地司令官 ウィード大佐も空母交代をテーマとして講演を行った。アメリカ大使館や国防省から見た日本の現状なども学習のテーマとなっている。

全体の乗組員(航空隊を含め)4,000人規模の交代であり、空母キティ・ホーク(CV63)からの移動は500~900人程度である。横須賀に初めて上陸する乗員や家族が多いことがわかる。横須賀入港に先立って、チームを横須賀に派遣しており、そのチームが居住や生活を支援していく体制をとっている。ぜひ、親善の「使徒」としての乗組員であって欲しい。また、様々な文化交流が生まれることを期待する。

⑦-5 その他 GW関連する事項

(1) 火災訓練

艦内のダメージ・コントロールは大変重要で、特に船内火災を想定した火災訓練は毎日のように行っており、私たち視察団が到着したときにも、ハンガーデッキを閉鎖する訓練を披露してくれた。これらの訓練には、他のクルーが立ち会い評価を与えることで訓練の質を高めている。大規模なものは、10チーム10カ所同時火災発生で3,000人の消火態勢訓練も行う。(ステニス洋上ブリーフィングにて)



ステニスのハンガーデッキでの消火訓練
(火災の延焼を防ぐために FireDoor で閉鎖)

(2) 上記消火チームのうち、2チームは

「REPAIR4」「REPAIR5」と呼ばれる Big Fire Protection Team であり、原子炉(Reactor)火災に対応する。

(3) ニミッツ級原子力空母の推進機関の安全性は初代ニミッツ(CVN68)よりも新しく就航するに従ってその安全性は増していると言える。それは、リアクター(反応炉)そのものの構造は変化していないのだが、周辺の制御システムなどは常に向上しているからだ。また、多重のバック・アップシステムを有していることは当然だ。(米海軍原子炉管理局上級代表 横須賀駐在 ジョー・ギスト(Dr. Joe Gist)博士による)

- (4) 係留しているときに、地震や(テロ)などで陸上からのユーティリティ供給が途絶えたときには、大事故になるのではという懸念があるが、全くの杞憂である。「GW」は4基のディーゼル発電装置を搭載しており、このうち1基でも通常の電力を100%供給する。様々なフェール・セーフの考えから400%の電力供給を可能にしている。ブレマートンでは実例があり、係留されていた原子力艦船に木が倒れ、地上からの電力が遮断されバックアップ機能が働いた。アライグマの被害などもある。横須賀では2重のパワー・バックアップシステムを採用した。バックアップを強化するのは当然である。(同上 ジョー・ギスト(Dr. Joe Gist)博士、およびダメージコントロール担当将校の発言による)
- (5) 原子力空母の推進機関は、どのような地震の衝撃によるパンチングを受けても推進力に影響はないと断言できる。空母セオドア・ルーズベルト(CVN71)は、2週間にわたりショックテストを受けている。実際に船の近くで、爆発物を起爆させる試験を行い記録をとった。(上記 ジョー・ギスト(Dr. Joe Gist)博士による)
- (6) 空母が洋上に出ているときに気をつけているのは、残された家族が地元との良好な関係を築くように努めていることだ。(ステニス洋上ブリーフィングより)
- (7) 原子力空母の艦長になるには、莫大な知識量が要求される。80名の中佐の中から6名が選ばれ、1年半の物理学と推進システムの勉強、さらに、CVNの副長に就任し、+6ヶ月間のリフレッシュ訓練が要求される。(ステニス洋上ブリーフィングより)

視察項目⑧太平洋艦隊司令部(COMPACFLT) 6月27日

太平洋艦隊司令官ウィラード大将(Admiral Robert F. Willard)による出迎え
モリー少将(RADM Mulloy)によるブリーフィング



太平洋艦隊司令部 プレゼンテーション



(1) 米海軍太平洋艦隊の運用に関する経済的考察

アメリカの国防予算は70兆円。そのうち米海軍太平洋艦隊は10兆円の展開をしている。有事を想定すると米国は3倍程度の防衛費を負担しなければならないと考える。原子力空母の60%と原子力潜水艦の60%以上が太平洋に展開している。日本の防衛予算4兆円のうち4,000億円を米軍に投資しているわけだがこの金額については当然米側にしてみれば、日本は安い投資で安全保障を得ていると考えている。

(2) アメリカ・日本のGDPを合わせると太平洋の4割を占める。物流のスライドが起きている。マラッカ海峡がスムーズに流れるかが戦略的に大切なことだ。日本のエネルギーの92%がこの地域を通過していることを考えると日本の防衛力の投入は「国益」につながる(モリー少将のブリーフィングより)。

- (3) 一方で、米太平洋艦隊の「Operation Command」の一つである第7艦隊の Carrier Strike Group は11隻が横須賀・6隻が佐世保に配備されているわけだが、もし、日本に基地を置いていない場合を想定すれば、サンディエゴやハワイから艦隊を派遣することを考えると、米国にとっても多大な利益を受けていることになる。
- (4) 米軍のこれからの課題は、「Regional Operation」、つまり前方展開先での作戦行動のあり方である。横須賀では、米海軍と海上自衛隊が親密(Face to Face)に話し合える環境が出来ている。日本国にも、もう少し海外展開が可能か考えて頂きたい(ジェームズ D ケリー在日米海軍司令官)。
- (5) もう一つ、米軍が重要な任務としていることが、「人道支援」である。2004年12月26日に発生したスマトラ沖地震津波の災害では、米海軍は強襲揚陸艦や病院船を素早く展開した。災害に対応するには、病院船は治療や手術などのソフト部門、空母や強襲揚陸艦は工作機械などの搬入や救助作業と役割分担を行う。(モリー少将のブリーフィングより)
- (6) 日本の災害への対応協力について



空母と病院船((USNS Mercy)の災害派遣)



日本国内で想定される大規模災害についても、米海軍は積極的に協力をする。また、大規模防災訓練に対しても強襲揚陸艦などの派遣要請があれば是非協力したい。(ジェームズ D ケリー在日米海軍司令官)

災害派遣や防災訓練への要請に応える
(写真は強襲揚陸艦 USS Essex, LHD-2)

視察項目⑨ RIMPAC 海上自衛隊護衛艦『きりしま』 6月27日



6月29日から7月31日にかけて、ハワイ洋上で行われるリムパック(Rim of the Pacific)2008に参加する海上自衛隊第3護衛隊群の護衛艦「霧島(DDG174)」を訪問した。

リムパックは世界一の規模を誇る多国籍演習である。①環太平洋地域の安定を促進させるための戦闘能力の準備、②海上の安全のための有効なグローバルパートナーシップ、③環境保護から考察した防衛。などをテーマに10カ国、艦船35隻、潜水艦6、航空機150、20,000人が参加する。

総 括

○視察を終えて

日米の防衛に関する考え方だけではなく文化の差にも考えさせられるものが多く、大きな重荷を背負って帰ってきたとも言える視察だった。

アメリカは、「グローバルな経済戦略を背景とした、中東・アジア地域のライフライン確保という命題に、各国へのリスク負担を、コスト意識によって考えている」ということが、改めて確認できた。

○基地と周辺住民の共存共栄

今回我々が視察した、San Diego (Coronado を含む) 及び Honolulu は、米国にとって極めて重要な海軍の根拠地である。これらの両軍港は横須賀軍港と比較して、それぞれ3～5倍の規模であるとの印象を持った。また、基地と住民・市街地が極めて調和をもって共存しており、都市の発展に軍隊が果たした役割を歴史的にも肯定する意識が、視察中随所に感じられた。

このような良好な軍民関係は、一朝一夕に構築できるものではなく、米国建国以来の国民的努力が結実した賜物であると改めて認識した。特に若い軍人への思いやりの心は非常に大きい。日本の自衛隊に対する国民の評価の「振れ」と比較すると、歴史的背景の違いは解っていても、大きなギャップがあることを痛感した。

また、核動力について、我が国と比較して過度な敏感さはまったく感じられず、ここにも海軍に対する信頼感の存在を、よく理解できた。

○「GW」の日本展開準備状況

「GW」は火災発生とその修復のために、予期せぬ時間をノースアイランド海軍航空隊基地で過ごしている。「GW」乗組員は、修理作業以外にも、基地内訓練施設を利用して、各種の訓練を実施しており、士気は旺盛であるとの説明であった。修理の完了時期と横須賀への到着時期は、いまだ流動的であろうが、現状では空母部隊の訓練を統括する海軍航空隊司令部の直接指導のもと、錬度の向上に努めている様子が如実にうかがえた。

○太平洋地域の安定への努力

今次視察で、ホノルル（パールハーバー）を訪問した際に、凶らずも RIMPAC 演習準備状況を垣間見る機会を得た。太平洋地域の安定のために、各国は政治、経済、軍事等、重層的な努力を続けている。その努力の一つであり、かつ重要な要素である軍事演習のために、各国海軍部隊が集結し、交流を深めている姿を現実に目にして、同盟国としての重要性・位置づけを改めて確認することができた。